

## 日本社会学における中国農村社会研究の課題（仮題）

柄澤 行雄

ごく一部の研究者の研究を除き、日本の社会学における中国農村社会研究は、第二次大戦後つい最近まではほとんど皆無に等しかったと言つてよい。それは、経済学、経済史学、政治学などの社会学以外の社会科学と比較して特異な存在であると言つてよいだろうし、中国農村社会研究では戦前においてそれなりの研究蓄積を有していた社会学にとっては、社会学者の怠慢とも批判されかねない奇妙な事態であった。もつとも、それはそれなりの理由があつてのことであり、一概に社会学者の責任に帰することはできない客観的事情があるのであるが、ようやく、八〇年代に入つて以降農村社会学者の中国農村社会研究が開始され、これからさらに活発化しようとしているように見受けられる。

この日本の動向に呼応するかのように、本年秋には中国における農村社会学研究者のネットワークが形成され、復活後一〇年以上にわたる経験の上に中国の社会学でも農村研究がいよいよ本格的に展開されていくことが期待される。

こうして日中双方の社会学者の中国農村研究への関心が高まる中で、主として政策的実践的課題に係わる研究に重点を置く中国の社会学と、もっぱら農村社会の基礎構造に係わる諸現象の実態把握に重点を置こうとする日本の社会学との間には、研究関心や内容などの面においてかなり隔たりがある。中国の現地での調査研究が事実上中国側との共同研究という形でしか可能でない我々にとって、ま

た研究の内容面においても大きく制約される中国では、さしあたりこうした隔たりをいかに橋渡ししながら、双方のもつ長所を活かして研究を行っていくかを考えることがまず一つの認識課題となる。この報告では、こうした事情を踏まえて、次のような点についてとりあげてみたい。第一に、改革開放政策が強力に展開されるなかで大きく変動しつつある現在の中国農村の現状を整理しながら、それに対する中国社会学における農村研究の動向を紹介すること。第二に、戦前戦中までに蓄積された日本の中国農村研究の成果の継承と展開の問題を、解放一集団化一開放という戦後の中国農村の変化と現状の中で考えてみること。第三に、広大な地域に多数の少数民族が混在する中国では、農村社会といつてもその存在形態と内容は我々の考える以上に多様であり、この多様性に対するアプローチの仕方についてどう考えたらよいかという問題。第四に、第二二この点と関連するが、日中の農村比較研究と係わる問題。第五に、第四の問題や日中間の研究交流・研究協力のあり方に関する問題を含めて地域研究としての中国農村研究の意義について。

（常磐大学）